

ふる ぱか だ

## 古墓を抱くアコウ



上地集落の真中屋御嶽には、推定樹齢400~600年のアコウの大木があります。アコウは傘を広げたように枝葉がぐんぐん成長する木で、根が他の樹木に巻きついて枯らすこともあります。この大木の根元に石棺がふたつあるとされますが、現在は根が絡みつき、ほとんど見えません。

かつてこの一帯を束ねたという屋真とヤマンサの夫婦がここに葬られたと伝わり、御嶽の祭神になっています。



## アコウとガジュマル

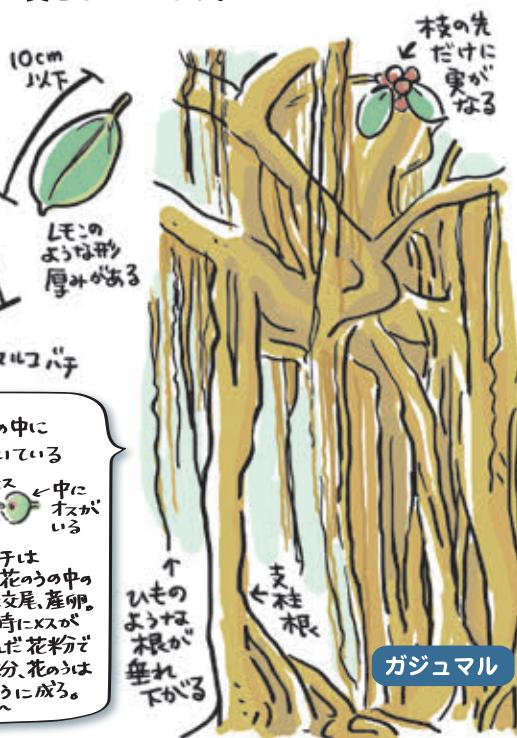


アコウには「締め殺しの木」という呼び名があります。鳥や樹の上で暮らす動物がアコウの実を食べ、その粪が枝の付け根や幹のくぼみに落ちて発芽します。地上にむかって気根を伸ばすとき、元々の木に絡みつきながら成長し、最終的に枯らしてしまうことが名前の由来です。

アコウと同じイチジク属の木で、宮古で身近なものにガジュマルがあります。ガジュマルも高い場所からひものような気根をたくさん垂らします。根が地面に達して太く成長すると、支柱

どちらも気根をもつ木ですが、実(花嚢)と葉を観察する方法で見分けられます。実は、大きさは似ていますが、ガジュマルは葉の付け根に実がなり、アコウは枝や幹に直接実をつけます。葉は、ガジュマルは3~10cmの楕円形で厚く光沢があり、アコウは薄い長楕円形で10~15cmほどです。

またアコウは年に2回ほど一斉に落葉し、短期間で新芽を出す変わった性質をもっています。



よなはしせきば  
与那霸支石墓



与那霸支石墓は、14世紀頃、目黒盛豊見親との戦いに敗れ、平良から与那霸に逃亡した与那霸ばらの一団の共同墓地といわれています。この墓は琉球石灰岩が使われ、4本の石の柱の上に一枚岩が載せられています。宮古にはミャーカと呼ばれる独自の様式をもつ古い墓があり、支石墓はミャーカのひとつとされています。与那霸地域にはこの墓と似た形状の墓が数多く分布しています。



よなは いちだん しもじよなは かんけい  
与那霸ばらの一団と下地与那霸の関係

14世紀頃にあったとされる戦の時代「与那霸ばら軍」。現在の盛加井一帯に拠点を持つ与那霸ばらの一団は、宮古中を駆け回り、多くの村落を侵攻、滅ぼしました。しかし、のちに外間・根間に拠点を持つ目黒盛豊見親との戦いに敗れ、現在の与那霸へ逃げのびたといわれています。

宮古島旧記や下地に伝わる伝承を読み解くと、与那霸ばらの一団と与那霸集落のつながりが見えてきます。

敗走した与那霸ばらの一団が上陸したトマイ御嶽付近をアカツバ(赤血場)と呼んでいた。一与那霸の伝説。いまもアカチャバと呼ばれ、ムスルムなどの祭祀が行われている。

支石墓は与那霸ばらの一団の共同墓地である  
—『宮古島庶民史』

●支石墓の位置

与那霸ばらの一団の根拠地とされる盛加井を境に北を川根原、南を与那霸原といった—『宮古島庶民史』



目黒盛豊見親に破れた与那霸ばらの一団はミヌズマの浜から与那霸へ逃げ、村を立てたとされ、これが与那霸村の始まりとされている—『宮古史伝』

与那霸集落周辺には与那霸ばらの一団に関する御嶽が点在している

県道を境として南を与那霸原、北を川根原といった—『宮古島庶民史』

よなはわん いま  
与那覇湾、今むかし



## ラムサール条約と与那覇湾

2012年7月、ルーマニアで開催された「ラムサール条約第11回締結国会議」において、与那覇湾が「重要な湿地」として認められ、ラムサール条約湿地として登録されました。

### ラムサール条約とは？

正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。世界の国々が協力して重要な湿地を守り、自然を壊さない形で利用するための条約。1971年イランのラムサールという町で結ばれたため、ラムサール条約と呼んでいる。日本は1980年に加入し、2020年2月現在、締約国数は171か国に及ぶ。

### 湿地とは？

川や湖、干潟、田んぼなど、水で潤っている場所をさす。



### ラムサール条約湿地とは？

条約に加入する国が、条約の決めた基準にしたがって重要な湿地を登録すること。

### ラムサール条約の3つの柱

保全・再生  
交流・学習  
・広報  
ワイスユース  
(賢明な利用)  
人間の活動を厳しく規制するのではなく、湿地を守りながら活用すること



約3年に一度開催

### 湿地の大事な役割



### 与那覇湾のラムサール条約登録

ラムサール条約には9つの基準があり、与那覇湾は下記の3つの基準を満たして登録されています。

1つでも満たせば登録はできる

#### 基準① 特定の生物地理区を代表するタイプの湿地

の湿地、または希少なタイプの湿地

の湿地、または希少なタイプの湿地

A: 低潮時6m以下の浅海域  
B: 海洋の潮下帯域(藻場を含む)  
E: 砂浜海岸  
G: 干潟

#### 基準② 絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地

日本だけでなく、世界のシギ・チドリ類の重要な休息地・越冬(えつとう)地。

#### 基準⑥ 水鳥の1種または1亜種の個体群

で、個体数の1%以上を定期的に支えている

少なくとも5種を支えている

### 登録までの経緯

- 1973 大規模な旱魃を機に水源確保のため、湾約500haを締め切り淡水湖化する構想が浮上
- 1983 反対運動により計画断念
- 1988 農地造成のために21.7ha埋立→自生のヒルギダマシ群落、
- 1997 宮古島唯一のフトヘナタリ(巻貝の一種)大個体群が消失
- 1996 久松漁港整備で8ha埋立
- 1997 カニ・エビ、貝類の漁獲量激減、赤土流入
- 2005 コンクリート護岸により自然海岸が減少→オカミミガイ類(巻貝の種類)の個体群消滅
- 2010 9月、環境省が「ラムサール条約湿地潜在候補地」に与那覇湾と八重干瀬(やびじ)を選定→条約登録の流れができる
- 2011 8月、「国指定与那覇湾鳥獣保護区・与那覇湾特別保護地区」の指定に関わる公聴会開催、全会一致で賛成  
11月、「国指定与那覇湾鳥獣保護区・与那覇湾特別保護地区」指定→法的条件が揃う
- 2012 7月、登録認定証授与



## サキシマスオウノキ



サキシマスオウノキは、板根といふ発達した板状の根をもちます。カーテン状の板根は通気を行ったり、幹を支えて安定させます。国内では奄美大島を北限とし、琉球諸島、ポリネシア、東南アジア、アフリカ東岸の河川や沿岸地に広く分布しています。

宮古島では、下地地区のトマイ御嶽(与那覇)とツヅ御嶽(上地)に自生しています。



## ふかふか浮かぶ！？ サキシマスオウノキ

サキシマスオウノキは、国内では奄美大島を北限として、沖縄島や八重山諸島にかけて分布しています。石垣島と西表島には、国の天然記念物に指定された大規模なサキシマスオウノキ群落があります。

サキシマスオウノキといえば、地面からそり立った波打つカーテンのような板根が有名ですが、板根以外に葉と果実にも面白い特徴があります。

サキシマスオウノキの葉は、裏側はくすんだ銀色をしており、表面のツヤのある様子とは全く異なります。

種子を守る果実はとても硬く、すべすべしてツヤがあり、大きさは8cm程度です。硬い果皮と種子の間には隙間があり、水に浮きやすい構造になっています。植物の果実や種子の散布方法には様々な種類がありますが、サキシマスオウノキは「潮流散布」という方法で広がります。木から落ちた果実は、川や海流に乗って浜などにそのままの形で流れ着き、発芽します。そのため、通常は海岸や汽水域、マングローブ林の陸側に群生します。

海岸線から離れている印象があるツヅ御嶽のサキシマスオウノキですが、昔と今では海岸線が違っていたためだと考えられます。



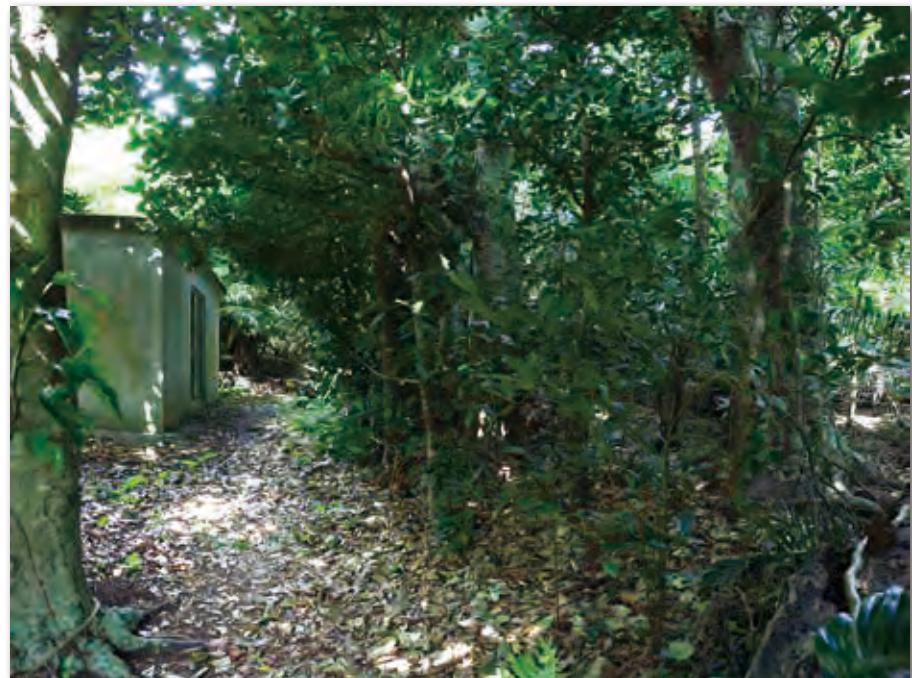
う たき しょく ぶつ ぐん らく

## トマイ御嶽の植物群落



まえ やま う たき しょく ぶつ ぐん らく

## 前山御嶽の植物群落



しょくぶつぐんらく よな はしゅうらく きた がわ い ち わん めん  
この植物群落は、与那霸集落の北側に位置する与那霸湾に面  
しています。海拔ゼロメートルの群落内は、湾内に流れ出す土  
が堆積して肥沃化し、発達した高木林を形成しています。市の  
天然記念物のサキシマスオウノキをはじめ、高木や低木、カズ  
ラ、ヒルギ類など、多種にわたる植物  
が生え、特異な景観を観察できます。

トマイ御嶽は、与那霸集落の祭祀の中  
心となる御嶽として知られています。



しょくぶつぐんらく よな はしゅうらく なん せい ない いち ばん  
この植物群落は、与那霸集落の南西にあり、集落内で一番  
高い前山という場所にあります。一帯はフクギを中心とした  
群落が形成され、中には幹周りが約1mにもなる大木があり  
ます。『与那霸邑誌』(1974)によると、1650(順治7)年頃  
に、前山に初めてガジュマルが試植  
され、1742(乾隆2)年にフクギが村  
垣防護林として集落内の御嶽に植樹  
されたと記されています。



けんりゅうさんじゅうろくねんおおなみひ  
「乾隆三十六年大波」碑



碑文『乾隆三十六年三月十日大波 宮國新里砂川友利』

この石碑は、1771(乾隆36)年旧暦3月10日に発生した地震による大津波の犠牲者を弔ったもので、与那霸集落南西の前山の中にあります。明和の大津波とも言われた大波は、宮古で2,500人以上の犠牲者を出したしました。特に甚大な被害を受けた宮国、新里、砂川、友利地域から多くの遺体が与那霸前浜に漂着し、集落の人々が合葬したと伝わります。当時の被害を示す、県内唯一の現存する石碑です。



下地の津波伝説

1771(乾隆36)年の地震によって引き起こされた「乾隆三十六年の大波」は「明和の大津波」とも言われ、宮古・八重山諸島に大きな被害をもたらしました。

様々な研究から、宮古にはそれより以前にも何度も大きな津波が襲来したと考えられています。

津波に関する伝説は、『宮古島日記』などにいくつか残されています。それらの記録を、考古学な

どの分野と照らし合わせた研究も行われており、14世紀前後と15世紀後半に、宮古に被害をもたらした津波があったと考えられています。また自然科学の分野では、津波石や堆積物の測定から、「乾隆三十六年の大波」以前に8回津波が襲来したとの報告もあります。

下地地域にも、いつの時代の津波か判明しないものも含め、津波伝説がいくつも残されています。



あか さき う たき

## 赤崎御嶽



赤崎御嶽は、皆愛集落南東にある赤崎岬の付け根に位置します。祭神は五穀豊穣をつかさどる大世の主豊見親です。『宮古史伝』(1927)によると、子方母天太が生んだ十二方の神々のうちの一神と伝えられます。祭祀は年3回、甲午の日に行われ、3集落(洲鎌、上地、与那霸)の神役たちで行います。

赤崎御嶽にまつわる伝説は数多く残され、古くから大切にされてきました。



## 赤崎御嶽の粟占い

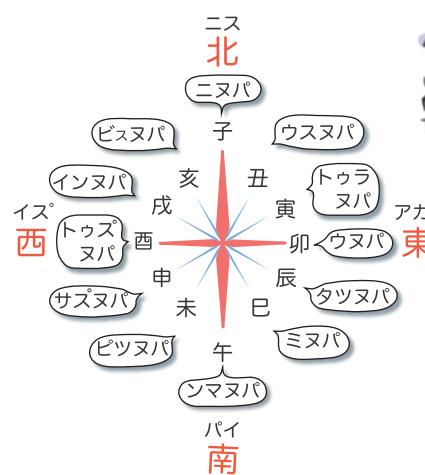
赤崎御嶽の粟占いは、まず洲鎌集落のツカサ(神役)たちが祭祀の前日に収穫した粟を洲鎌のウブンミ御嶽で搗いて粉末にします。その粟から出た糠を使って、年に1度、赤崎御嶽のヌカガターで粟の占いを行います。以前は、下地中学校の側にヌカパリと呼ばれる祭祀用の粟を作る畑がありました。

ヌカガターは岬の波打ち際にある窪地で、満潮時に糠を入れ、糠が水面に浮かぶと豊作、沈むと不作、小魚

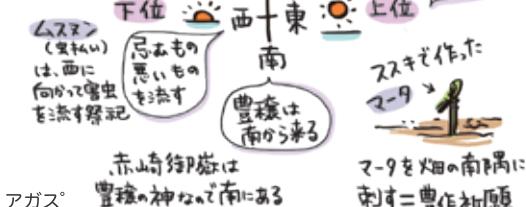
が集まると子どもに病気が流行り、大きい魚が集まると大人の病気が流行る、また黒いナマコが集まると台風のあたり年などとされます。悪い結果が出ると御嶽に戻って神願いからやり直し、良い結果が出るまで繰り返すため、かつては夜までかかったこともありました。



## 宮古の方角のはなし



※地域によって多少発音が異なります



宮古では、方言で方角を表すとき、干支がよく使われます。例えば赤崎御嶽の母神、子方母天太は「子方=北」の神様で、北は神様としては最上位になります。方角は御嶽や地域名に使われることが多く、方角の方言名がわかると、いろんなことが発見できます。